



『薬の話』

「薬は、何のためにある？」

「もちろん、病気を治すため」

薬への誤解はここにある。信じられないだろうが、病気を治す薬は、この現代でもほとんど存在しない。

大半の薬は、症状を和らげることによって、病気の進行を遅らせる、または病気を改善させるためにある。病気をピタリと治す特效薬は、ごく限られた病気にしか存在しないのだ。

この、薬が病気を治すという誤解は、多くの人々が、病気の症状が消えたら、病気が治ったと考えるためである。

しかし、症状は病気の正体ではない。病気の結果生じる、体の反応にすぎない。だから、症状が薬で消えたからといって、病気が治ったのではないのである。これは、痛み止めで痛みが止まったからといって、骨折は治っていないことから分かるだろう。

たとえば風邪薬は、風邪の原因であるウイルスを殺す薬ではない。風邪の症状をおさえて体力の消耗を防ぎ、体自身の免疫がウイルスを退治する手助けをするものだ。だから医者には、「この薬を飲んで、安静にしてください」と言うのである。間違えても、「この薬で熱と咳を止めて、せつせと働きなさい」とは言わない。

また高血圧や糖尿病の薬は、血圧や血糖を下げて、心筋梗塞や脳卒中の原因となる血管の障害を未然に防ぐためのものだ。決して、高血圧や糖尿病自体を治す薬ではない。だから医者には、「血圧も血糖も良くなったから、さあ、薬を止めましょう」とは言えないのである。

医者

だって、「さあ、この薬で、あなたの病気は一

発で治りますよ」と誇らかに言いたいものなのだ。でも、どんな病気にも特效薬が存在するような日は、人類が人造人間を作り出すくらいに文明が進まない限りやって来ないだろう。テレビや車が直せるのは、あくまで人間が作ったものだからだ。

また、「先生、一番よく効く薬をください」と言われるのも辛い。一番効く薬など存在しないのだ。存在しないから、世の中に、似たような薬がたくさんあるのである。

最後に、

薬について、特に危険なことを挙げたい。これらは、命にかかわることがある。

薬にはプラセボ（偽薬）効果というのがある。本来薬ではないものも、薬だと強く信じて服用すれば、なぜか効くこともあるのである。

一、他人の薬を飲んだり、他人に薬をあげたりしてはいけない。

たとえば、ミミズの黒焼きも、おまじないも、効く人には効いてしまう。これが一般的な治療と認められないのは、誰にでも効くわけではないからである。

二、ひとつの病気に対して、複数の医療機関から薬をもらってはいけない。

確かに病気には「病は気から」の側面もある。だから医者には、薬理学的に無意味だと思っても、患者が強く望めば、「あんまり、薬に頼っちゃだめだよ」なんて言い訳しながら、プラセボ効果を期待して、害の少ない薬を処方することもある。

三、効きが悪いからといって、決められた量以上に服薬してはいけない。

しかし、すべての病気が、気持ちのせいでは起るわけではないし、薬は毒にもなりうるものだから、薬者はむやみやたらと、患者の望むままに処方するわけにもいかない。

薬は体の調味料みたいなもの。上手く使えば効果抜群だが、間違えると、すべてが台無しになると、服薬は慎重にお願いします。

